

【小説部門・佳作賞】

最後の花火

筑紫女学園高等学校 一年 比嘉 結菜

――ミーン、ミンミンミンミーン

(嗚呼、帰ってきたな)

この音を聴くといつも思う。

一面に広がる田んぼ。小川が流れる静かな音。そして……遙か遠く聞こえる、祭りの準備をする人々の声。俺は今年も実家のある田舎に帰って来た。妻と娘と共に。毎年この村である花火大会に来たのだ。最後の花火大会を訪ねるために。

「ここに来るの、一年ぶりね」

「そうだな」

(もう、そんなに経つんだな……)

妻の問いかけに答えながら思う。

「香澄、もうすぐ着くよ」

「はい」

元気に答える娘も、今年で五歳。月日が経つのは本当に早く、それは少し、寂しく感じる。もう、あれから二十年以上もの月日が流れてしまった。

俺の実家のある村の人口は六百人程。出て行く者はいても、入ってくる者はいない。過疎化が進んだ、小さな村。そのため、毎年夏にある花火大会も今年で最後。反対の声はあったが、跡継ぎがいらないのだから、やむを得ない。だから……これが最後のチャンス。あいつに会える、最後のチャンス。俺にできることは何もない。

少しずつ、少しずつ、実家が近づいてくる。昔ながらの古民家。俺が十八年を共にした場所。

トントン

格子戸を叩くと乾いた音が響く。

「母さん、入るよ」

「お久しぶりです、お義母さん」

「おばあちゃーん」

家に入り、声をかけると奥から母が顔を覗かせる。

「はいはい、いらっしゃい」

懐かしい声を聴くと、どこかホッとする。母にくつつく娘を横目に、俺は客間へと足を運ぶ。

スーツケースを開け中身を出す。スーツケースの大きさの割に、少ない荷物は乱雑としていた。ここで一人になると、どうしても思い出してしまう。小学生時代の俺の親友、悠馬の

ことを。

俺はこの村が大嫌いだった。何もないこの村が。カフェも、本屋も、ゲームセンターも、コンビニも。あるのは古びた自動販売機と田んぼと畑、それから、毎年夏に祭が行われる神社。学校の生徒数も少なく、一学年に一クラスで充分足りた。そのクラスにも、生徒は十五人いるかどうか。

俺が小学校四年生の頃、一人の男の子が引っ越して来た。それが悠馬だ。悠馬は俺より一歳上で、東京から来ていた。転校生は珍しく、悠馬は瞬く間に人気者になった。

俺が悠馬と仲良くなったのは、悠馬が引っ越して来て、一ヶ月経った頃だった。その日はこの村の花火大会の日だった。村の人々は、思い思いの場所で花火を見る。でも、この村には花火の穴場スポットがあるのだ。……と言っても、毎年誰もいないが。神社の境内の人混みを通り抜けると、裏山に入る細い道がある。そこに入って、十分程行ったところにそれはある。小さな広場のような場所。奥は崖のようになっていて、そこから空いっぱいの花火が見える。俺は毎年そこで一人、花火を見る。

その年もそこで一人で花火を見ようと思っていた。俺がそこに着き、広場の中央に立った時だった。

「へえー。こんな良い所があるんだなー」一人で来た筈なのに、後ろから声がしてギョッとした。そこに居たのは、悠馬だった。悠馬は、崖の所まで行った。風が吹くと、気持ち良さそうに目を細める。

「あ、悪い、勝手について来た」

悠馬は悪びれる様子もなくサラッと云った。

(は？ つけて来たってなんの為に……)

「あ、何の為に？ って思ってる？」

「え？」

「凶星か。だっておかしいじゃん。もうすぐ花火始まるのに、山に入ってくんだもん。不思議に思ってさ」

そう言われても納得できない。

「それにしても、ここ良いなー。花火が綺麗に見えそう」

そう言うと悠馬はくると振り向き云った。

「なあ、俺もここで花火、見て良いか？ ……あつ、えっと……」

「一樹……」

「一樹か。俺は悠馬。まあ、俺のこと知ってそうだな。顔に書いてある」

「は？」

「一樹はいくつ？」

「十……」

「ってことは俺の一個下だな。お、そろそろ時間だ」

ー ドーンー！

悠馬の後ろで花火が上がった。空いっぱいに広がった花びらは黄色い花卉を散らしていた。

ガラッ

「パパーッ！」

娘が襖を開けて飛び込んできて。また、悠馬のことを考えてしまっていた。娘が無邪気な笑顔で膝に乗って来る。

「ママが、後十分で行くよだって。楽しみだね、お祭り。綿飴買ってね？」

「ああ、買おうな、綿飴。じゃあ、行く準備するか」

「はい」

そう言うと娘はタッタタッタと出て行ってしまう。

俺もそろそろ、用意をしなくては。持ち歩く、小さな鞆に必要な物を詰めて行く。

(財布、スマホ、鍵……こんなものか……)

部屋の奥にある写真に目がいく。無邪気に笑う悠馬と、仏頂面の俺。笑うことはもともと嫌いだ。だから写真も嫌い。アルバムを開くと、盗み撮りと言えないような写真ばかりある。あの写真は俺の、数少ない「盗み撮りではない写真」だ。確か、秋ごろに彼が我が家に遊びにきた時に撮ったもの。珍しく、友達を連れてきた俺に母は驚き、やりすぎだと思うくらいに悠馬のことをもてなしていた。

「パパ早くー！」

ぼんやりと当時のことを考えていると、娘の声が居間から聞こえた。

(行かなくては……)

荷物を持ち、外へ出る。居間には、浴衣姿の娘がいた。

「パパ見てよ、可愛いでしょ」

「ああ、可愛いよ。似合ってる」

娘は、パット笑顔になった。

(香澄の笑顔は母親似か……)

母と妻と娘の四人で神社へ向かう。畑が緑色に輝いている。そしてまた、その輝きをキラキラとした目で見ていた悠馬を思い出す。

花火大会の日をきっかけに、俺と悠馬は仲良くなった。もともと、俺の友達はゼロと言っても過言ではなかった。いつも仏頂面で、自分の気持ちを言葉にできない。そんな俺をみんなは「感情がない」と言って避けた。俺と悠馬が仲良くなったのは、悠馬が勘が良かったからだと思う。悠馬は何故か、俺の考えている事が分かっていた。母ですら「あんたは何を考えているか、全く分からないわね」と言っただけなのに。

神社に近づくに連れ、人の声が大きくなる。その騒がしさは懐かしく、今年で最後だと思

うと寂しくなる。

「パパ、綿飴屋さんあったよ。ねえ、買って」

「ああ」

娘と一緒に綿飴を買う。嬉しそうに笑う娘はとても可愛い。

(親バカだな……)

並ぶ屋台を見ながら、歩く。ついつい、すれ違う人を見てしまうのは、俺が悠馬に会いたいと強く願っているからなのだろうか……。境内から五十メートル程離れたところにブルーシートを敷き、座る。

「香澄ちゃん、おばあちゃんが好きな物買ってあげるからね」

「ありがとう！」

「私達は屋台見て来るから、少し待ってて」

妻が娘の手を繋ぎながら言う。三人で行くから、荷物の見張り番になれ、ということか。

「分かった」

(悠馬の事を考えてしまうから行かないで、とは言えないな……)

三人の背中がどんどん遠のいて行く。

俺がこの村を好きと思えるようになったのは、悠馬のおかげだ。田んぼや、道に咲いている小さな花を、悠馬は目をキラキラさせて見ていた。

「一樹は、この村嫌い？」

「嫌い」

「あはは、即答だね」

「何もないじゃないか。この村には」

「そうだね。コンビニも、ゲーセンもないもんなあ。でも、俺はこの村が好きだよ。何も無いわけじゃない。沢山あるじゃん。小川も田んぼも野花も、ここにしかないものだってあるじゃん。都会だと、こんなものないよ」

「でも……」

「それにさ、その場所の良さを見つけないと、つまらないよ。この村には、いい所も悪い所もたくさんある。都会にも、いい所と悪い所がある。悪い所ばかり見ていたら、大切なものを見失っちゃうよ」

「……」

「あれ？ 俺かっこいいこと言った？」

悠馬はニヤリと笑った。あの時、俺は否定も肯定もできなかった。頭の中では肯定していたが、愚かなプライドがそれをするを許さなかった。勘のいい悠馬にはそんなことお見通しだったんだろうが。

「パパー、見て見て！！」

遠くから聞こえる娘の声が俺を現実へと引き戻す。娘はくまのぬいぐるみを抱えていた。五歳の娘が抱えているため、くまはかなり大きく見える。しかし、大した大きさはないのだろう。

「ママが取ってくれたの」

「良かったな」

娘の頭をクシャッと撫でる。嬉しそうに笑う娘が愛おしい。

「射的があってね。静香さん二等のくまの景品を取ったのよ。香澄ちゃんが欲しかったものを一発で取ったのよ。すごいわね」

母が微笑みながら言う。妻は恥ずかしそうに笑い隣に座る。花火が上がるまで、まだ少し時間がある。

悠馬が引っ越すことになったのは、彼と出会ったあの夏から、ちょうど一年が経とうというときだった。もともと、悠馬の親は転勤族だったため、いつかはいなくなることが分かっていた。人付き合いが苦手な俺は、友達一人消えたって大丈夫だろうと思っていた。そう、思っていたんだ…。だが、違った。初めて、人を失う悲しみを知った。仏頂面の俺の考えが分かる程勘がよかった悠馬。この村を好きだと思われてくれた悠馬。悠馬がいなくなって、心にぽっかりと穴が空いてしまった気分だった。スマホのない時代。俺は彼との連絡手段を一切持っていなかった。出会いがあるから別れがあるのよ。母は俺にそう言った。でも、悠馬との別れだけは受け入れられなかった。受け入れたくなかった。

悠馬がいなくなっても、時間がいたずらに過ぎていく。ゆっくりなようであつという間に過ぎる日々。その日の中に悠馬が、大切な俺の親友がいけないのが耐えられない。いつの間にか結婚し、娘に恵まれた。大切なもう一つの家族。その家族の話を悠馬としたい。俺の最初で最後の親友と語りたい。

多くの人が空を見上げる。花火大会がもうすぐ始まる。隣を見ると娘が目をキラキラさせて、空を見ている。ふと、あの穴場スポットを見る。今の位置だったら、ギリギリあの場所が見える。そこには……成人男性と思われる姿があった。

(ゆう……ま……?)

そんなはずはない。分かっているのに、俺はあの場所へと行こうとしている。

「ちょっと！ どこに行くの!？」

「ごめん、少し待ってて」

妻に言うなり俺は駆け出した。人混みを抜け裏山に入る。ここに来るのはあの日、悠馬が引っ越す前日以来だ。俺が大きくなったのか、道は昔よりも狭く感じる。そのことにほんの少し腹立たしさを覚えながらあの日の事を思い出す。悠馬が引っ越す前日はここで花火大会があった。

俺と悠馬はこの穴場スポットで花火を見た。二人で座り、空いっぱい広がる花火を眺めていた。悠馬は突然、口を開いた。

「なあ、一樹。次会ったときの合言葉決めないか？」

「いいよ」

今思えば、子供のお遊び。だが、そのお遊びがなんだかかっこよく思えた。

「何がいいかなあ」

無言の空間が続いた。二人とも思い浮かばないのだ。考えているうちにたくさんの花火が上がる。俺はある言葉を思いついた。

「最後の花火は、何色ですか？」

「え……？」

「合言葉」

「いいね」

その時、黄色くて、綺麗な夜の花が空いっぱいに広がった。それはその年の最後の花火だった。

「俺、絶対この村に帰ってくる。絶対にこの場所でまた一樹と花火を見るんだ」

悠馬は俺に笑いかけながら言った。

服に引っかかる木の枝も気にならないくらい、無我夢中で進む。この先にいるのは悠馬じゃないかもしれない。そう思っても、進む足は止まることを知らない。

広場に着く。広場の奥で空を見上げる人は、間違いなく悠馬だった。昔より背が高く、髪も伸びてる。だが、俺は確信した。根拠はないが、彼は悠馬だ。

「ゆ……」

言いかけて、止まる。気配に反応した彼が振り向いた。

ーードーンー！

悠馬の後ろで花火が上がる。黄色くて、鮮やかな夜の花が漆黒の空を覆う。その光景は二十年以上も昔のことを思い出させる。あのとき、ここで二人の少年も空に咲く花を見ていた。そして約束を交わした。またこの場所で会うこと。そして。そして……。

こちらを見る彼の表情がふっと綻ぶ。

「最後の花火は」

耳に届く、優しい彼の声。当時より少し、低くなった気がする。俺はゆっくりと口を開いた。

「何色ですか？」